

厚生科学研究費補助金保健福祉総合研究事業

若年痴呆の処遇と評価法の開発に関する研究

平成11年度研究報告書

主任研究者 宮 永 和 夫

若年痴呆の処遇に関する研究

主任研究者

宮永 和夫 (群馬大学保健管理センター・助教授：群馬県前橋市)

分担研究者

米村 公江 (群馬大学医学部神経精神医学教室・助手：群馬県前橋市)

研究協力者

荒井 節子 (大和町農村検診センター・婦長：新潟県南魚沼郡大和町)

岡田 ちか子 (ぼけをかかえる家族の会奈良県支部・初老期痴呆家族会代表：奈良県奈良市)

笠原 洋勇 (東京慈恵会医科大学柏病院・教授：千葉県柏市)

郡 暢茂 (社会福祉法人すだち会・評議員：徳島県徳島市)

斎藤 芳雄 (ゆきぐに大和総合病院・院長：新潟県南魚沼郡大和町)

高田 和夫 (群馬県前橋保健福祉事務所・保健福祉部長：群馬県前橋市)

高橋 正彦 (高知医科大学精神科：スウェーデン・ルンド大学)

千葉 潜 (青南病院・院長：青森県八戸市)

長瀬 輝誼 (高月病院・院長：東京都八王子市)

西島 英利 (小倉蒲生病院・院長：福岡県北九州市)

前島 滋 (日本ヘルスケアコンサルタンツ・取締役：東京都新宿区)

山崎 学 (慈光会病院・院長：高崎市)

研究要旨

1. 若年痴呆患者の介護上の困難度を検討するため、対象者を介護する施設介護者と家庭介護者より具体的な介護内容の聞き取りを行い、別に調査を行った老年期の痴呆の介護内容と比較検討を行った。
2. オランダ及びイギリスにある若年期痴呆の介護施設を視察し、各施設の責任者との意見交換を行った。
3. 若年痴呆患者の入所施設の試案をまとめた。
4. 現制度上での具体的な処遇方法を含んだ「若年期の脳機能障害者介護マニュアル」を作成し、全国の関係機関に配布した。

研究の目的

若年痴呆に関する医療・福祉への総合的な施策を実現するため、国内とともに、諸外国（欧米・豪州）を含めた実態調査を行った。具体的な研究内容としては、

- I 若年痴呆の介護上の困難度（介護困難度）の検討
- II オランダ及び英国における若年痴呆の実態
- III 若年痴呆専門施設や支援システム新設の施設基準や人員等の提言である。

I 若年痴呆の介護上の困難度（介護困難度）の検討

1. 対象

入所者の調査は、群馬県及び奈良県内の医療機関（精神病院13施設、総合病院3施設の計16施設）及び福祉施設（特別養護老人ホーム17施設）に、在宅者の調査は、初老期痴呆患者会（岡田代表）に協力をいただいた。

2. 調査内容

調査した内容は、対象者の年齢、性別、診断名、障害の程度、ADL（日常生活動作能力）、日常生活の中で見られる問題、公的支援制度の利用、家族や介護者の心配事である。実際に用いられた調査表の内容は資料1に示した。

3. 研究期間

調査した期間は、平成11年12月から平成12年3月末だった。なお、医療機関及び福祉施設については、調査員（介護福祉士など）が訪問し、施設責任者や担当者から対象者の状態について聞き取り調査を行った。対象者が在宅の場合は、介護者（家族）に質問紙を配布し、対象者の状態について記入をお願いした。

4. 結果

1) 全体の調査結果

A) 性別、年齢（表1）

全対象数は142名で、内訳は、男性100名、平均年齢56.9歳、女性42名、平均年齢56.8歳であった。男性が女性の約2倍見られたが、平均年齢には有意差を見なかった。

表1. 性別、年齢

	人数	平均年齢±SD (歳)
男性	100	56.9± 6.50
女性	42	56.8± 6.30
合計	142	56.9± 6.47

B) 処遇場所（表2）

医療機関入院が52名（精神病院37名、一般病院15名）、福祉施設入院が48名（老人保健施設7名、その他の施設41名）、在宅が42名だった。疾患別では、アルツハイマー病は在宅に、それ以外の痴呆は施設が多かった。

表2. 処遇場所

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	合計 (N=142)
医療機関入院	10(20.4)	16(42.1)	10(41.7)	16(51.6)	52(36.6)
精神病院	6(12.2)	9(23.7)	9(37.5)	13(41.9)	37(26.1)
一般病院	4(8.2)	7(18.4)	1(4.2)	3(9.7)	15(10.6)
福祉施設入所	4(8.2)	20(52.6)	13(54.2)	11(35.5)	48(33.8)
老人保健施設	3(6.1)	2(5.3)	0(0.0)	2(6.5)	7(4.9)
その他の施設	1(2.0)	18(47.4)	13(54.2)	9(29.0)	41(28.9)
在宅	35(71.4)	2(5.3)	1(4.2)	4(12.9)	42(29.6)
合計	49	38	24	31	142

<説明>

疾患の種類について、医療機関と在宅、福祉施設と在宅の間に、統計学的有意差を認めた（それぞれ $p < 0.0001$ ）。

C) 疾患名 (表3)

疾患名では、アルツハイマー病、血管性痴呆、頭部外傷後遺症が多かった。施設別に見ると、全体では、在宅が多く、次にその他の施設、精神病院と続いた。疾患別に見ると、アルツハイマー病は在宅に、血管性痴呆はその他の施設に、頭部外傷後遺症は精神病院とその他の施設に多かった。

表3. 疾患名 (性別、年齢別)

疾患コード	主疾患	男性 (人)	女性 (人)	合計 (人)	発症時の 平均年齢と 標準偏差 (歳)
		100	42	142	48.4 ± 10.57
01-01	アルツハイマー病	33(33.0)	16(38.1)	49(34.5)	54.1 ± 3.57
01-02	ピック病	3(3.0)	0(0.0)	3(2.1)	54.3 ± 3.30
01-05	パーキンソン病	0(0.0)	1(2.4)	1(0.7)	15.0
01-07	脊髄小脳変性症	1(1.0)	2(4.8)	3(2.1)	43.0 ± 11.00
01-08	ミトコンドリア脳筋症	0(0.0)	1(2.4)	1(0.7)	49.0
01-10	脳変性症	1(1.0)	1(2.4)	2(1.4)	(*)
03-01	血管性痴呆	29(29.0)	9(21.4)	38(26.8)	49.1 ± 7.58
06-01	一酸化炭素中毒	3(3.0)	0(0.0)	3(2.1)	(*)
06-02	プロパンガス中毒	1(1.0)	0(0.0)	1(0.7)	50.0
06-03	アルコール性痴呆	2(2.0)	0(0.0)	2(1.4)	(*)
07-01	脳腫瘍	2(2.0)	2(4.8)	4(2.8)	42.0 ± 14.17
08-01	頭部外傷後遺症	19(19.0)	5(11.9)	24(16.9)	40.5 ± 13.13
09-01	脳炎	1(1.0)	0(0.0)	1(0.7)	35.0
09-02	脳脊髄膜炎	0(0.0)	1(2.4)	1(0.7)	48.0
09-04	梅毒	2(2.0)	0(0.0)	2(1.4)	(*)
11-01	てんかん	2(2.0)	3(7.1)	5(3.5)	35.7 ± 14.52
13-01	原因不明の痴呆	1(1.0)	1(2.4)	2(1.4)	(*)

注意 (*)は、年齢不詳が含まれているため、平均年齢と標準偏差がだせない。

2) アルツハイマー病、血管性痴呆、頭部外傷後遺症、その他の痴呆の4群の比較検討

A) 合併症 (表4)

血管性痴呆は、脳血管障害や高血圧の合併が多く見られたが、他の3群には合併症は少なかった。施設別に見ると、医療機関入院に合併症を持つ人が多かった。

表4. 疾患と合併症

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
脳血管障害	2 (4.1)	4 (10.5)	0 (0.0)	2 (6.5)	8 (5.6)
高血圧	1 (2.0)	8 (21.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (6.3)
糖尿病	2 (4.1)	1 (2.6)	1 (4.2)	1 (3.2)	5 (3.5)
心疾患	1 (2.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	1 (3.2)	3 (2.1)
腫瘍	2 (4.1)	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (2.1)
胃腸障害	0 (0.0)	1 (2.6)	1 (4.2)	2 (6.5)	4 (2.8)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
脳血管障害	3 (5.8)	3 (6.3)	2 (4.8)	8 (5.6)
高血圧	7 (13.5)	2 (4.2)	0 (0.0)	9 (6.3)
糖尿病	4 (7.7)	0 (0.0)	1 (2.4)	5 (3.5)
心疾患	2 (3.8)	0 (0.0)	1 (2.4)	3 (2.1)
腫瘍	1 (1.9)	1 (2.1)	1 (2.4)	3 (2.1)
胃腸障害	4 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (2.8)

B) 障害の程度 (表5)

アルツハイマー病、血管性痴呆、頭部外傷後遺症、その他の痴呆の4群に分けて障害の程度を見ると、アルツハイマー病は重度～中等度が多いのに対して、他の3群は中等度～軽度が多かった。なお、施設別では、いずれの施設間にも統計学的有意差は認められなかった。

表5. 疾患と障害の程度

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
軽度	6 (12.2)	13 (34.2)	10 (41.7)	8 (25.8)	37 (26.1)
中等度	17 (34.7)	15 (39.5)	10 (41.7)	13 (41.9)	55 (38.7)
重度	22 (44.9)	8 (21.1)	4 (16.7)	9 (29.0)	43 (30.3)
不明	3 (6.1)	1 (2.6)	0 (0.0)	1 (3.2)	5 (3.5)
記載なし	1 (2.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.4)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
軽度	13 (25.0)	16 (33.3)	8 (19.0)	37 (26.1)
中等度	19 (36.5)	21 (43.8)	15 (35.7)	55 (38.7)
重度	17 (32.7)	10 (20.8)	5 (11.9)	43 (30.3)
不明	3 (5.8)	0 (0.0)	2 (4.8)	5 (3.5)
記載なし	0 (0.0)	1 (2.1)	1 (2.4)	2 (1.4)

<説明>

障害の程度については、医療機関、福祉施設、在宅の3群間に統計学的有意差を認めなかった。

C) 在宅介護者 (表6)

全体では、配偶者(妻)が圧倒的に多く、疾患別に見ても、同様であった。

表6. 在宅介護者の内訳

	アルツハイマー病 (N=35)	血管性痴呆 (N=2)	頭部外傷後遺症 (N=1)	その他 (N=4)	全体 (N=42)
子	2 (5.7)	0 (0.0)	1 (100)	0 (-0.0)	3 (7.1)
親	2 (5.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (4.8)
配偶者	31 (88.6)	2 (100)	0 (0.0)	4 (100)	37 (88.1)

D) ADL (日常生活動作能力)

(1) 行動範囲 (表7)

全体では中等度異常 (家の中) が多く、次に正常 (普通) が多かった。疾患別に見ると、アルツハイマー病、頭部外傷後遺症及びその他の痴呆は中等度異常～正常の占める割合が多かったが、血管性痴呆については重度異常 (室内～寝たきり) の割合が多かった。施設別に見ると、在宅は軽度が多かったが、医療機関・福祉施設とも施設入所者は中等度以上の割合が多かった。

表7. 行動範囲

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
普通	17 (34.7)	8 (21.1)	7 (29.2)	11 (35.5)	43 (30.3)
家の周囲	8 (16.3)	7 (18.4)	5 (20.8)	2 (6.5)	22 (15.5)
家の中	14 (28.6)	13 (34.2)	7 (29.2)	10 (32.3)	44 (31.0)
室内	4 (8.2)	3 (7.9)	1 (4.2)	1 (3.2)	9 (6.3)
寝たきり	5 (10.2)	6 (15.8)	3 (12.5)	5 (16.1)	19 (13.4)
記載なし	1 (2.0)	1 (2.6)	1 (4.2)	2 (6.5)	5 (3.5)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
普通	15 (28.8)	9 (18.8)	19 (45.2)	43 (30.3)
家の周囲	5 (9.6)	10 (20.8)	7 (16.7)	22 (15.5)
家の中	17 (32.7)	19 (39.6)	8 (19.0)	44 (31.0)
室内	5 (9.6)	2 (4.2)	2 (4.8)	9 (6.3)
寝たきり	10 (19.2)	4 (8.3)	5 (11.9)	19 (13.4)
記載なし	0 (0.0)	4 (8.3)	1 (2.4)	5 (3.5)

<説明>

行動範囲について、福祉施設と在宅の間に統計学的有意差を認めた (p<0.02)。

(2) 歩行 (表8)

全体では普通 (独歩) が多く、次に一部介助 (介助必要) であった。疾患別では、アルツハイマー病、頭部外傷後遺症及びその他の痴呆は一部介助～普通の占める割合が多かったが、血管性痴呆については寝たきりの割合も多く見られた。施設別に見ると、福祉施設入所者に一部介助の必要なものが多かった。他方、寝たきりは、福祉施設よりも医療機関入所者や在宅者に多かった (これは、福祉施設が寝たきり防止の取り組みを行っている結果かもしれない)。

表8. 歩行

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
独歩	29(59.2)	7(18.4)	10(41.7)	11(35.5)	57(40.1)
歩行器必要	2(4.1)	0(0.0)	0(0.0)	3(9.7)	5(3.5)
介助必要	11(22.4)	21(55.3)	11(45.8)	9(29.0)	52(36.6)
ほう	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(3.2)	1(0.7)
寝たきり	7(14.3)	10(26.3)	3(12.5)	5(16.1)	25(17.6)
記載なし	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(6.5)	2(1.4)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
独歩	23(44.2)	7(14.6)	27(64.3)	57(40.1)
歩行器必要	3(5.8)	0(0.0)	2(4.8)	5(3.5)
介助必要	15(28.8)	31(64.6)	6(14.3)	52(36.6)
ほう	0(0.0)	1(2.1)	0(0.0)	1(0.7)
寝たきり	11(21.2)	8(16.7)	6(14.3)	25(17.6)
記載なし	0(0.0)	1(2.1)	1(2.4)	2(1.4)

<説明>

歩行について、医療機関と福祉施設の間、福祉施設と在宅の間に統計学的有意差を認めた（それぞれ $p < 0.001$ 、 $p < 0.0001$ ）。

(3) 起坐 (表9)

全体では「普通」が多く、次は「介助必要」であった。疾患別に見ると、アルツハイマー病と頭部外傷後遺症は「介助必要」～「普通」の占める割合が多かったが、血管性痴呆とその他の痴呆は半介助も比較的多く認められた。施設別に見ると、医療機関入所と在宅は「普通」が多いのに対して、福祉施設入所は「介助必要」の割合が多かった。

表9. 起坐

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
普通	31(63.3)	8(21.1)	13(54.2)	11(35.2)	63(44.4)
自力可能	6(12.2)	9(23.7)	3(12.5)	2(6.5)	20(14.1)
介助必要	4(8.2)	8(21.1)	5(20.8)	6(19.4)	23(16.2)
ギャジの支え	3(6.1)	9(23.7)	0(0.0)	7(22.6)	19(13.4)
全く動けない	4(8.2)	4(10.5)	3(12.5)	2(6.5)	13(9.2)
記載なし	1(2.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.7)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
普通	27(51.9)	11(22.9)	28(66.7)	66(46.5)
自力可能	7(13.5)	9(18.8)	4(9.5)	20(14.1)
介助必要	3(5.8)	16(33.3)	4(9.5)	23(16.2)
ギャジの支え	11(21.2)	6(12.5)	2(4.8)	19(13.4)
全く動けない	4(7.7)	6(12.5)	3(7.1)	13(9.2)
記載なし	0(0.0)	0(0.0)	1(2.4)	1(0.7)

<説明>

起坐について、医療機関と福祉施設の間、福祉施設と在宅の間に統計学的有意差を認めた（それぞれ $p < 0.002$ 、 $p < 0.001$ ）。

(4) 食事 (摂食: 表10)

全体では「普通」が多く、次が「ほぼ自立」だった。疾患別に見ると、アルツハイマー病と血管性痴呆は「一部～全介助」が多く認められたが、頭部外傷後遺症とその他の痴呆は「一部介助」から「普通」の占める割合が多かった。施設別に見ると、いずれの間にも違いが見られなかった。

表10. 食事

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
普通	3 (26.5)	8 (21.1)	12 (50.0)	13 (41.9)	46 (32.4)
ほぼ自立	12 (24.5)	10 (29.0)	3 (12.5)	5 (16.1)	31 (21.8)
一部介助	9 (18.4)	7 (18.4)	5 (20.8)	5 (16.1)	26 (18.3)
介助必要	5 (10.2)	6 (15.8)	2 (8.3)	3 (9.7)	16 (11.3)
全介助	9 (18.4)	5 (13.2)	2 (8.3)	5 (16.1)	21 (14.8)
記載なし	1 (2.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.4)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
普通	21 (40.4)	11 (22.9)	14 (33.3)	46 (32.4)
ほぼ自立	10 (19.2)	10 (20.8)	11 (26.2)	31 (21.8)
一部介助	8 (15.4)	13 (27.1)	5 (11.9)	26 (18.3)
介助必要	4 (7.7)	8 (16.7)	4 (9.5)	16 (11.3)
全介助	7 (13.5)	6 (12.5)	8 (19.0)	21 (14.8)
記載なし	2 (3.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.4)

<説明>

食事については、いずれの群間にも有意差を認めなかった。

(5) 排尿 (表11)

全体では「常時失禁」が多く、次が「普通」だった。疾患別に見ると、アルツハイマー病と血管性痴呆は「常時失禁」が多く認められたが、頭部外傷後遺症は「普通」の占める割合が多かった。施設別に見ると、医療機関入所と在宅は正常 (普通) と重度 (常時失禁) の2つに分かれるのに対して、福祉施設入所は、失禁 (時に～常時) が多く、特に重度が一番多かった。

表11. 排尿

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
普通	11 (22.4)	4 (10.5)	10 (41.7)	10 (32.3)	35 (24.6)
不完全	9 (18.4)	9 (23.7)	3 (12.5)	1 (3.2)	22 (15.5)
時に失禁	3 (6.1)	6 (15.8)	3 (12.5)	5 (16.1)	17 (12.0)
失禁多い	7 (14.3)	7 (18.4)	4 (16.7)	5 (16.1)	23 (16.2)
常時失禁	18 (36.7)	12 (31.6)	4 (16.7)	9 (29.0)	43 (30.3)
記載なし	1 (2.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.2)	2 (1.4)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
普通	17 (32.7)	5 (10.4)	13 (31.0)	35 (24.6)
不完全	8 (15.4)	6 (12.5)	8 (19.0)	22 (15.5)
時に失禁	4 (7.7)	10 (20.8)	3 (7.1)	17 (12.0)
失禁多い	7 (13.5)	11 (22.9)	5 (11.9)	23 (16.2)
常時失禁	15 (28.8)	16 (33.3)	12 (28.6)	43 (30.3)
記載なし	1 (1.9)	0 (0.0)	1 (2.4)	2 (1.4)

<説明>

尿失禁については、医療機関と福祉施設の間、福祉施設と在宅の間に統計学的有意差を認めた (それぞれ $p < 0.05$)。

(6) 便失禁 (表12)

全体では「失禁あり」と「なし」が半々だった。疾患別に見ると、アルツハイマー病とその他の痴呆は「失禁あり」と「なし」が半々に認められたが、血管性痴呆は「失禁あり」が多く、頭部外傷後遺症は「なし」が多かった。施設別に見ると、差は見られなかった。

表12. 便失禁

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
なし	21 (42.9)	11 (28.9)	14 (58.3)	11 (35.5)	57 (40.1)
あり	23 (46.9)	19 (50.0)	5 (20.8)	14 (45.2)	61 (43.0)
記載なし	5 (10.2)	8 (21.1)	5 (20.8)	6 (19.4)	24 (16.9)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
なし	26 (50.0)	10 (20.8)	21 (50.0)	57 (40.1)
あり	24 (46.2)	21 (43.8)	16 (38.1)	61 (43.0)
記載なし	2 (3.8)	17 (35.4)	5 (11.9)	24 (16.9)

<説明>

便失禁については、いずれの群間にも統計学的有意差を認めなかった。

(7) 入浴 (表13)

全体では「半～全介助」が多かった。疾患別に見ると、アルツハイマー病とその他の痴呆は「半～全介助」が、血管性痴呆は「全介助」が多かったが、頭部外傷後遺症は「一部介助」～「普通」が他と比較して多かった。施設別に見ると、医療機関入院と在宅は「普通」と「全介助」の2つに分かれるのに対して、福祉施設入所では、「普通」ないし「不完全」は少なく、介助が必要なもの（一部介助～全介助）の割合が多かった。

表13. 入浴

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
普通	7 (14.3)	0 (0.0)	5 (20.8)	8 (25.8)	20 (14.1)
不完全	3 (6.1)	6 (15.8)	3 (12.5)	0 (0.0)	12 (8.5)
一部介助	7 (14.3)	7 (18.4)	6 (25.0)	3 (9.7)	23 (16.2)
半介助	12 (24.5)	7 (18.4)	2 (8.3)	8 (25.8)	29 (20.4)
全介助	19 (38.8)	18 (47.4)	8 (33.3)	12 (38.7)	57 (40.1)
記載なし	1 (2.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.7)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
普通	9 (17.3)	1 (2.1)	10 (23.8)	20 (14.1)
不完全	6 (11.5)	3 (6.3)	3 (7.1)	12 (8.5)
一部介助	5 (9.6)	12 (25.0)	6 (14.3)	23 (16.2)
半介助	9 (17.3)	12 (25.0)	8 (19.0)	29 (20.4)
全介助	28 (53.8)	19 (39.6)	15 (35.7)	57 (40.1)
記載なし	0 (0.0)	1 (2.1)	0 (0.0)	1 (0.7)

<説明>

入浴については、医療機関と福祉施設の間、福祉施設と在宅の間に統計学的有意差を認めた (それぞれ $p < 0.05$)。

(8) 洗面 (表14)

全体では「全介助」が多く、次が「普通」だった。疾患別にみると、アルツハイマー病、血管性痴呆及びその他の痴呆は「一部～全介助」が多く認められたが、頭部外傷後遺症は「一部介助」～「自立」の占める割合が多かった。施設別に見ると、差は認められなかった。

表14. 洗面

	アルツハイマー病(N=49)	血管性痴呆(N=38)	頭部外傷後遺症(N=24)	その他(N=31)	全体(N=142)
普通	8(16.3)	3(7.9)	7(29.2)	8(25.8)	27(19.0)
不完全	4(8.2)	8(21.1)	5(20.8)	3(9.7)	20(14.1)
一部介助	7(14.3)	8(21.1)	4(16.7)	5(16.1)	24(16.9)
半介助	11(22.4)	6(15.8)	1(4.2)	6(19.4)	24(16.9)
全介助	9(18.4)	13(34.2)	6(25.0)	0(0.0)	38(26.7)
記載なし	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

	医療機関入院(N=52)	福祉施設入所(N=48)	在宅(N=42)	全体(N=142)
普通	12(23.1)	5(10.4)	10(23.8)	27(19.0)
不完全	7(13.5)	8(16.7)	5(11.9)	20(14.1)
一部介助	7(13.5)	12(25.0)	5(11.9)	24(16.9)
半介助	7(13.5)	10(20.8)	7(16.7)	24(16.9)
全介助	10(19.2)	18(37.5)	15(35.7)	43(30.3)
記載なし	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

<説明>

洗面については、いずれの群間にも有意差を認めなかった。

(9) 着脱衣 (表15)

全体では「半～全介助」が多かった。疾患別にみると、アルツハイマー病と血管性痴呆及びその他の痴呆は「半～全介助」が多かったが、頭部外傷後遺症は「不完全」～「普通」が他と比較して多かった。施設別に見ると、医療機関入院や在宅が福祉施設入所より重度の人が多く見られたが、統計学的には有意差はなかった。

表15. 着脱衣

	アルツハイマー病(N=49)	血管性痴呆(N=38)	頭部外傷後遺症(N=24)	その他(N=31)	全体(N=142)
普通	6(12.2)	4(10.5)	6(25.0)	8(25.8)	24(16.9)
不完全	5(10.2)	5(13.2)	6(25.0)	2(6.5)	18(12.7)
一部介助	5(10.2)	4(10.5)	3(12.5)	4(12.9)	16(11.3)
半介助	13(26.5)	12(31.6)	4(16.7)	7(22.6)	36(25.4)
全介助	19(38.8)	12(31.6)	5(20.8)	10(32.3)	46(32.4)
記載なし	1(2.0)	1(2.6)	0(0.0)	0(0.0)	2(1.4)

	医療機関入院(N=52)	福祉施設入所(N=48)	在宅(N=42)	全体(N=142)
普通	12(23.1)	4(8.3)	8(19.0)	24(16.9)
不完全	7(13.5)	6(12.5)	5(11.9)	18(12.7)
一部介助	3(5.8)	9(18.8)	4(9.5)	16(11.3)
半介助	11(21.2)	16(33.3)	9(21.4)	36(25.4)
全介助	18(34.6)	12(25.0)	16(38.1)	46(32.4)
記載なし	1(1.9)	1(2.0)	0(0.0)	2(1.4)

<説明>

着脱衣については、いずれの群間にも有意差を認めなかった。

(10) 視力 (表16)

全体でも、疾患別でも、また施設別にみても、「不完全」～「普通」が多く認められた。疾患間、施設間の比較では、いずれの間にも有意差を認めなかった。

表16. 視力

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
普通	32(65.3)	29(76.3)	17(70.8)	22(71.0)	100(70.4)
不完全	12(24.5)	5(13.1)	5(20.8)	7(22.6)	29(20.4)
大きいもの見える	2(4.0)	2(5.3)	1(4.2)	1(3.2)	6(4.2)
顔の輪郭分かる	1(2.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.7)
明暗のみ	1(2.0)	0(0.0)	1(4.2)	0(0.0)	2(1.4)
記載なし	1(2.0)	2(5.3)	0(0.0)	1(3.2)	4(2.8)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
普通	40(76.9)	32(66.7)	28(66.7)	100(70.4)
不完全	8(15.4)	12(25.0)	9(21.4)	29(20.4)
大きいもの見える	2(3.8)	2(4.2)	2(4.8)	6(4.2)
顔の輪郭分かる	0(0.0)	0(0.0)	1(2.4)	1(0.7)
明暗のみ	1(1.9)	1(2.1)	0(0.0)	2(1.4)
記載なし	1(1.9)	1(2.1)	2(4.8)	4(2.8)

<説明>

視力については、いずれの群間にも有意差を認めなかった。

(11) 聴力 (表17)

全体でも、疾患別でも、また施設別にみても、「不完全」～「普通」が多く認められた。疾患間、施設間の比較では、いずれの間にも有意差を認めなかった。

表17. 聴力

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
普通	40(81.6)	30(78.9)	18(75.0)	25(80.6)	113(79.6)
不完全	8(16.3)	7(18.4)	5(20.8)	5(16.1)	25(17.6)
補聴器で普通	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
補聴器でも大声	1(2.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.7)
殆ど聞こえず	0(0.0)	0(0.0)	1(4.2)	0(0.0)	1(0.7)
記載なし	0(0.0)	1(2.6)	0(0.0)	1(3.2)	2(1.4)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
普通	42(80.8)	37(77.1)	34(80.9)	113(79.6)
不完全	8(15.4)	10(20.8)	7(16.7)	25(17.6)
補聴器で普通	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
補聴器でも大声	0(0.0)	0(0.0)	1(2.4)	1(0.7)
殆ど聞こえず	1(1.9)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.7)
記載なし	1(1.9)	1(2.1)	0(0.0)	2(1.4)

<説明>

聴力については、いずれの群間にも有意差を認めなかった。

(12) 買い物 (表18)

全体でも、疾患別でも、施設別でも、「全くだめ」～「付き添えば可能」が多く認められた。疾患別にみると、アルツハイマー病、血管性痴呆、その他の痴呆が、「全くだめ」が多いのに対して、頭部外傷後遺症は「付き添えば可能」が多かった。施設別にみると、施設間に差はなく、いずれも「全くだめ」が多かった。

表18. 買い物

	アルツハイマー病(N=49)	血管性痴呆(N=38)	頭部外傷後遺症(N=24)	その他(N=31)	全体(N=142)
普通	2(4.0)	3(7.9)	2(8.3)	2(6.5)	9(6.3)
少額なら可能	4(8.2)	2(5.3)	2(8.3)	2(6.5)	10(7.0)
付き添えば可能	9(18.4)	13(34.2)	11(45.8)	10(32.3)	43(30.3)
全くだめ	34(69.4)	20(52.8)	9(37.5)	17(54.8)	80(56.3)

	医療機関入院(N=52)	福祉施設入所(N=48)	在宅(N=42)	全体(N=142)
普通	4(7.7)	1(2.1)	4(9.5)	9(6.3)
少額なら可能	2(3.8)	4(8.3)	4(9.5)	10(7.0)
付き添えば可能	13(25.0)	21(43.8)	9(21.4)	43(30.3)
全くだめ	33(63.5)	22(45.8)	25(59.5)	80(56.3)

<説明>

買い物については、いずれの群間にも有意差を認めなかった。

(13) 家事 (表19)

全体でも、疾患別でも、施設別でも、「全くだめ」～「介助必要」が多く認められた。疾患別に見ると、アルツハイマー病と頭部外傷後遺症は「可能」～「簡単なこと可能」が見られるのに対して、血管性痴呆では「可能」は認められなかった。施設別に見ると、在宅に「可能」～「簡単なこと可能」が見られるのに対して、施設(医療機関、福祉施設とも)ではそれらの対象は非常に少なかった。

表19. 家事

	アルツハイマー病(N=49)	血管性痴呆(N=38)	頭部外傷後遺症(N=24)	その他(N=31)	全体(N=142)
可能	0(0.0)	0(0.0)	2(8.3)	1(3.2)	3(2.1)
簡単なこと可能	6(12.2)	0(0.0)	1(4.2)	1(3.2)	8(5.6)
清潔さ維持できず	2(4.1)	3(7.9)	3(12.5)	4(12.9)	12(8.5)
介助必要	5(10.2)	10(26.3)	5(20.8)	2(6.5)	22(15.5)
全くだめ	35(71.4)	25(65.8)	13(54.2)	22(71.0)	95(66.9)
記載なし	1(2.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(3.2)	2(1.4)

	医療機関入院(N=52)	福祉施設入所(N=48)	在宅(N=42)	全体(N=142)
可能	1(1.9)	0(0.0)	2(4.8)	3(2.1)
簡単なこと可能	1(1.9)	0(0.0)	7(16.7)	8(5.6)
清潔さ維持できず	6(11.5)	3(6.3)	3(7.1)	12(8.5)
介助必要	8(15.4)	10(20.8)	4(9.5)	22(15.5)
全くだめ	36(69.2)	34(70.8)	25(59.5)	95(66.9)
記載なし	0(0.0)	1(2.1)	1(2.4)	2(1.4)

<説明>

家事については、福祉施設と在宅の間に統計学的有意差を認めた (p<0.02)。

(14) 移動・外出 (表20)

全体でも、疾患別でも、施設別でも、「できない」～「付き添う必要あり」が多く認められた。施設別では、在宅に普通(公共輸送機関を一人で利用可能)が見られ、医療機関・福祉施設入所との間に違いが認められた。

表20. 移動・外出

	アルツハイマ ー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後 遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
公共輸送機関を一人 で利用可能	2 (4.1)	0 (0.0)	1 (4.2)	2 (6.5)	5 (3.5)
一人では困難	2 (4.1)	0 (0.0)	1 (4.2)	0 (0.0)	3 (2.1)
付き添えば可能	8 (16.3)	1 (2.6)	1 (4.2)	4 (12.9)	14 (9.9)
付き添う必要あり でられない	22 (44.9)	26 (68.4)	16 (66.7)	17 (54.8)	81 (57.0)
記載なし	15 (30.6)	11 (28.9)	5 (20.8)	8 (25.8)	39 (27.5)
	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
公共輸送機関を一人 で利用可能	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (11.9)	5 (3.5)
一人では困難	1 (1.9)	0 (0.0)	2 (4.8)	3 (2.1)
付き添えば可能	4 (7.7)	2 (4.2)	8 (19.0)	14 (9.9)
付き添う必要あり でられない	28 (53.8)	36 (75.0)	17 (40.5)	81 (57.0)
記載なし	19 (36.5)	10 (20.8)	10 (23.8)	39 (27.5)
	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)

<説明>

移動・外出については、医療機関と在宅の間、福祉施設と在宅の間に統計学的有意差を認めた（それぞれ $p < 0.05$, $p < 0.002$ ）。

(15) 金銭の管理 (表21)

全体でも、疾患別でも、施設別でも、「扱えない」が多く認められた。疾患別・施設別に見ても、各疾患間・各施設間に統計学的有意差は認めなかった。

表21. 金銭の管理

	アルツハイマ ー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後 遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
可能	1 (2.0)	4 (10.5)	3 (12.5)	2 (6.5)	10 (7.0)
付き添い必要	6 (12.2)	11 (28.9)	6 (25.0)	4 (12.9)	27 (19.0)
扱えない	42 (85.7)	23 (60.5)	15 (62.5)	24 (77.4)	104 (73.2)
記載なし	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.2)	1 (0.7)

金銭の管理	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
可能	3 (5.8)	4 (8.3)	3 (7.1)	10 (7.0)
付き添い必要	8 (15.4)	12 (25.0)	7 (16.7)	27 (19.0)
扱えない	40 (76.9)	32 (66.7)	32 (76.2)	104 (73.2)
記載なし	1 (1.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.7)

<説明>

金銭の管理については、いずれの群間にも有意差を認めなかった。

(16) ADL (日常生活動作能力) -まとめ-

1) 疾患別

食事、排尿、尿便失禁、入浴、洗面、着脱衣に関しては、アルツハイマー病、血管性痴呆、その他の痴呆に比較して、頭部外傷後遺症の障害の程度が軽く、歩行、起坐に関しては、血管性痴呆、頭部外傷後遺症に比較して、アルツハイマー病の障害の程度は軽い、という、疾患による違いが見られた。しかし、行動範囲、視力、聴力、買い物、家事、移動・外出、金銭の管理に関しては、疾患の間に違いは見られなかった。

2) 施設別

行動範囲、歩行、起坐、排尿、入浴、家事、移動・外出に関しては、医療機関、在宅に比較して、福祉施設に障害の程度が重い者が見られた。しかし、食事、便失禁、洗面、着脱衣、視力、聴力、買い物、金銭の管理に関しては、施設の間に違いは見られなかった。

E) 公的支援制度や他の組織の利用

(1) 障害者手帳の有無 (表22)

全体では、「あり」が多かった。疾患別では、血管性痴呆で「あり」の割合が明らかに多かったが、アルツハイマー病、頭部外傷後遺症及びその他の痴呆は、「なし」の割合も比較的多かった。施設別に見ると、福祉施設入所と在宅は「あり」が多かったが、医療機関入院では「なし」が多かった。

(2) 障害者手帳の種類 (表22)

全体では、身体障害者手帳が多かった。疾患別では、アルツハイマー病は精神障害者手帳が多く、血管性痴呆、頭部外傷後遺症及びその他の痴呆は身体障害者手帳が多かった。なお、精神障害者手帳と身体障害者手帳の両者を取得しているのはアルツハイマー病のみであった。

表22. 障害者手帳

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
あり	27(55.1)	28(73.7)	14(58.3)	18(58.1)	87(61.3)
身体障害者手帳	2	27	14	6	59
身体障害者手帳と精神障害者手帳	4	0	0	0	4
精神障害者手帳	2	1	0	1	22
療育手帳	0	0	0	1	1
その他(手帳名の記載なし)	1	0	0	0	1
なし	21(42.9)	10(26.3)	10(41.7)	12(38.7)	53(37.3)
記載なし	1(2.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(3.2)	2(1.4)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
あり	21(40.4)	41(85.4)	25(59.5)	87(61.3)
身体障害者手帳	16	40	3	59
身体障害者手帳と精神障害者手帳	0	0	4	4
精神障害者手帳	4	1	17	22
療育手帳	1	0	0	1
その他(手帳名の記載なし)	0	0	1	1
なし	31(59.6)	7(14.6)	15(35.7)	53(37.3)
記載なし	0(0.0)	0(0.0)	2(4.8)	2(1.4)

<説明>

障害者手帳については、医療機関と福祉施設の間、福祉施設と在宅の間に、有意差を認めた(それぞれ $p < 0.0001$, $p < 0.05$)。

(3) 通院医療公費負担 (表23)

入所中の対象者数の割合が疾患により違うため、正確な検討は難しい。全体では、「受けていない」が多い。疾患別にみると、アルツハイマー病、血管性痴呆及びその他の痴呆は、「受けていない」が多いのに対して、頭部外傷後遺症病は「受けている」の割合が他の3群と比較して多かった。施設別にみると、医療機関では「受けていない」が多かったが、福祉施設では「受けている」が多く、在宅は「受けている」が約半数だった。

表23. 通院医療公費負担の利用

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
受けている	17 (34.7)	17 (44.7)	12 (50.0)	9 (29.0)	55 (38.7)
受けていない	16 (32.7)	3 (7.9)	3 (12.5)	2 (6.5)	24 (16.9)
入所中のため受けていない	13 (26.5)	18 (47.4)	9 (37.5)	18 (58.1)	58 (40.8)
記載なし	3 (6.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (6.5)	5 (3.5)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
受けている	1 (1.9)	36 (75.0)	18 (42.9)	55 (38.7)
受けていない	3 (5.8)	3 (6.3)	18 (42.9)	24 (16.9)
入所中のため受けていない	48 (92.3)	8 (16.7)	2 (4.8)	58 (40.8)
記載なし	0 (0.0)	1 (2.0)	4 (9.5)	5 (3.5)

(4) デイサービス (表24)

入所中の対象者数の割合が疾患により違うため、検討は難しい。全体では、「受けていない」が多い。疾患別にみると、血管性痴呆、頭部外傷後遺症及びその他の痴呆は、「受けていない」が多いのに対して、アルツハイマー病は「受けている」が比較的多かった。施設別にみると、在宅のみ、「受けている」が半数を占めていた。

表24. デイサービス

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
受けている	20 (40.8)	1 (2.6)	0 (0.0)	1 (3.2)	22 (15.5)
受けていない	15 (30.6)	4 (10.5)	5 (20.8)	9 (29.0)	33 (23.2)
入所中のため受けていない	14 (28.6)	28 (73.7)	16 (66.7)	19 (61.3)	77 (54.2)
記載なし	0 (0.0)	5 (13.2)	3 (12.5)	2 (6.5)	10 (7.1)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
受けている	0 (0.0)	0 (0.0)	22 (52.4)	22 (15.5)
受けていない	3 (5.8)	13 (27.1)	17 (40.5)	33 (23.2)
入所中のため受けていない	49 (94.2)	26 (54.2)	2 (4.8)	77 (54.2)
記載なし	0 (0.0)	9 (18.7)	1 (2.4)	10 (7.1)

(5) ホームヘルパー支援 (表25)

入院・入所中の対象者数の割合が疾患により違うため、検討は難しい。全体でも、疾患別でも、「受けていない」が多い。但し、アルツハイマー病は、他の3群と比較して「受けている」の割合が多く見られる。施設別にみると、在宅でも「受けていない」が多い。

表 25. ホームヘルパー支援

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
受けている	7(14.3)	1(2.6)	0(0.0)	0(0.0)	8(5.6)
受けていない	26(53.1)	4(10.5)	23(20.8)	10(32.3)	45(31.7)
入所中のため受けていない	14(28.6)	28(73.7)	16(66.7)	19(61.3)	77(54.2)
記載なし	2(4.0)	5(13.2)	3(12.5)	2(6.4)	12(8.5)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
受けている	0(0.0)	0(0.0)	8(19.0)	8(5.6)
受けていない	3(5.8)	13(27.1)	29(69.1)	45(31.7)
入所中のため受けていない	49(94.2)	26(54.2)	2(4.8)	77(54.2)
記載なし	0(0.0)	9(18.7)	3(7.1)	12(8.5)

(6) 有料サービス (表 26)

無回答が多く、正確な検討は難しい。全体でも、疾患別でも、さらに施設別にみても、「受けている」は少ない。但し、アルツハイマー病は、他の3群と比較して受けている人の割合は多かった。また、在宅も他と比較して「受けている」は多かった。

表 26. 有料サービス

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
受けている	6(12.2)	1(2.6)	0(0.0)	2(6.4)	9(6.3)
受けていない	5(10.2)	28(73.7)	19(79.2)	19(61.3)	71(50.0)
記載なし	38(77.6)	9(23.7)	5(20.8)	10(32.3)	62(43.7)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
受けている	0(0.0)	3(6.3)	6(14.3)	9(6.3)
受けていない	40(76.9)	28(58.3)	3(7.1)	71(50.0)
記載なし	12(23.1)	17(35.4)	33(78.6)	62(43.7)

(7) ボランティアの支援 (表 27)

無回答が多く、正確な検討は難しい。全体でも、疾患別でも、さらに施設別でも、「受けている」は少ない。とくに、アルツハイマー病では、「受けている」が認められなかった。施設別にみると、福祉施設は「受けている」が認められるが、医療機関と在宅では、「受けている」はなかった。

表 27. ボランティアの支援

	アルツハイマー病 (N=49)	血管性痴呆 (N=38)	頭部外傷後遺症 (N=24)	その他 (N=31)	全体 (N=142)
受けている	0(0.0)	4(10.5)	2(8.3)	4(12.4)	10(7.0)
受けていない	49(87.8)	26(68.4)	19(79.2)	22(71.0)	110(77.5)
記載なし	6(12.2)	8(21.1)	3(12.5)	5(16.1)	22(15.5)

	医療機関入院 (N=52)	福祉施設入所 (N=48)	在宅 (N=42)	全体 (N=142)
受けている	0(0.0)	10(20.8)	0(0.0)	10(7.0)
受けていない	46(88.5)	26(54.2)	38(90.5)	110(77.5)
記載なし	6(11.5)	12(25.0)	4(9.5)	22(15.5)

(8) 公的支援制度などの利用のまとめ

障害者手帳に関して、福祉施設入所と在宅では、取得が多かったが、医療機関入院では、取得していないが多かった。手帳の種類については、全体では身体障害者手帳が多かった。疾患別では、アルツハイマー病患者は精神障害者手帳が多く、血管性痴呆、頭部外傷後遺症及びその他の痴呆患者は身体障害者手帳が多かった。なお、アルツハイマー病患者には、精神障害者手帳と身体障害者手帳の両者を取得している者が見られた。

通院公費負担に関して、受けていないが多かった。なお、疾患別に見ると、アルツハイマー病、血管性痴呆及びその他の痴呆患者に比較して、頭部外傷後遺症病患者は、受けているの割合が多かった。

デイサービス、ホームヘルプサービス及び有料サービスに関しては、受けている者は少なかった。また、ボランティアの支援は、福祉施設に見られたが、在宅と医療機関には見られなかった。

F) 家族や介護者の心配事

(1) 回答者 (表 28)

全体としては、「配偶者」、次に「職員」と続く。疾患別にみると、アルツハイマー病が、在宅が多いためか「配偶者」との回答が多かったが、他の疾患では入所者が多いため「職員」の回答が多かった。施設別にみると、医療機関は「配偶者」と「兄弟」、在宅は「配偶者」、福祉施設は「職員」の回答が多かった。

表 28. 回答者

	アルツハイマー病 (N=41)	血管性痴呆 (N=20)	頭部外傷後遺症 (N=12)	その他 (N=12)	全体 (N=85)
配偶者	30 (73.2)	6 (30.0)	1 (8.3)	5 (41.7)	42 (49.4)
兄弟	1 (2.4)	3 (15.0)	1 (8.3)	3 (25.0)	8 (9.4)
子	3 (7.3)	1 (5.0)	1 (8.3)	0 (0.0)	5 (5.9)
その他親戚	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (8.3)	0 (0.0)	1 (1.2)
職員・調査員	3 (7.3)	9 (45.0)	7 (58.3)	2 (16.7)	21 (24.7)
記載者不明	4 (9.8)	1 (5.0)	1 (8.3)	2 (16.7)	8 (9.4)

	医療機関入院 (N=25)	福祉施設入所 (N=21)	在宅 (N=39)	全体 (N=85)
配偶者	10 (40.0)	4 (19.0)	28 (71.8)	42 (49.4)
子	1 (4.0)	0 (0.0)	4 (10.3)	5 (5.9)
兄弟	8 (32.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (9.4)
その他親戚	1 (4.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.2)
職員・調査員	1 (4.0)	7 (33.0)	3 (7.7)	21 (24.7)
記載者不明	4 (16.0)	0 (0.0)	4 (10.3)	8 (9.4)

(2) 心配の内容 (表29、下図)

全体としては、「物忘れ」、「経済面」、日常生活の介助として「食事」・「入浴」・「尿・便失禁」、「入院・入所施設」などの心配事が多かった。疾患別にみると、アルツハイマー病では、「徘徊・迷子」が、血管性痴呆では、「尿・便失禁」と「不眠」が、頭部外傷後遺症では「物忘れ」がそれぞれ他の疾患より多い頻度で認められた。なお、頭部外傷後遺症は、アルツハイマー病や血管性痴呆と違い、「金銭管理」をのぞく日常生活の介助全般、入院・入所施設、経済面に関して、心配事の頻度の割合が低かった。

施設別に見ると、「入浴介助」の心配は在宅に多く認められた。「不眠」については、医療機関入所に多く認められた。「入院・入所施設」については、医療機関入院や在宅に多かったが、福祉施設入所では心配は少なかった。「経済面」については、医療機関入院や在宅に多かったが、福祉施設入所では心配は少なかった。

なお、それ以外の項目については、統計学的には違いは見られなかった。

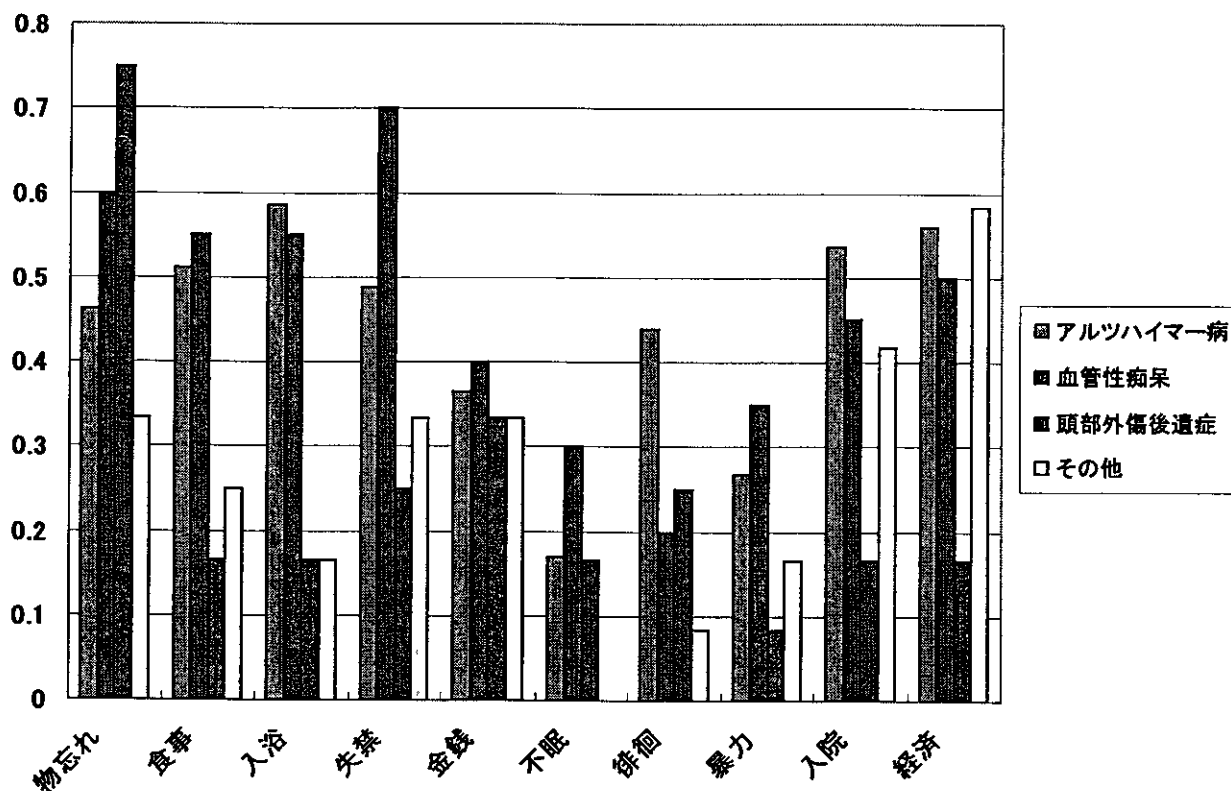


表 29. 心配の内容

	アルツハイマー病 (N=41)	血管性痴呆 (N=20)	頭部外傷後遺症 (N=12)	その他 (N=12)	全体 (N=85)
物忘れ	19(46.3)	12(60.0)	9(75.0)	4(33.3)	44(51.8)
食事	21(51.2)	11(55.0)	2(16.7)	3(25.0)	37(43.5)
入浴	24(58.5)	11(55.0)	2(16.7)	2(16.7)	39(45.9)
失禁	20(48.8)	12(70.0)	3(25.0)	4(33.3)	41(48.2)
金銭	15(36.6)	8(40.0)	4(33.3)	4(33.3)	31(36.5)
不眠	7(17.0)	6(30.0)	2(16.7)	0(0.0)	15(17.6)
徘徊	18(43.9)	4(20.0)	3(25.0)	1(8.3)	26(30.6)
暴力	11(26.8)	7(35.0)	1(8.3)	2(16.7)	21(24.7)
入院・入所	22(53.7)	9(45.0)	2(16.7)	5(41.7)	38(44.7)
経済	23(56.1)	10(50.0)	2(16.7)	7(58.3)	42(49.4)

<説明>

食事については、アルツハイマー病と頭部外傷後遺症の間、血管性痴呆と頭部外傷後遺症の間にそれぞれ統計学的有意差を認めた（それぞれ $p<0.05$, $p<0.05$ ）。入浴については、アルツハイマー病と頭部外傷後遺症の間に統計学的有意差を認めた（ $p<0.02$ ）。尿・便失禁については、血管性痴呆と頭部外傷後遺症の間、血管性痴呆とその他の痴呆の間にそれぞれ統計学的有意差を認めた（それぞれ $p<0.02$, $p<0.05$ ）。不眠については、血管性痴呆とその他の痴呆の間に統計学的有意差を認めた（ $p<0.05$ ）。徘徊については、アルツハイマー病とその他の痴呆の間に統計学的有意差を認めた（ $p<0.05$ ）。入院・入所施設について、アルツハイマー病と頭部外傷後遺症の間に統計学的有意差を認めた（ $p<0.05$ ）。経済面について、アルツハイマー病と頭部外傷後遺症の間、頭部外傷後遺症とその他の痴呆の間にそれぞれ統計学的有意差を認めた（それぞれ $p<0.02$, $p<0.05$ ）。

	医療機関入院 (N=25)	福祉施設入所 (N=21)	在宅 (N=39)	全体 (N=85)
物忘れ	14(56.0)	14(66.7)	16(41.0)	44(51.8)
食事	10(40.0)	8(38.1)	19(48.7)	37(43.5)
入浴	11(44.0)	5(23.8)	23(59.0)	39(45.9)
失禁	11(44.0)	11(52.4)	19(48.7)	41(48.2)
金銭	7(28.0)	9(42.9)	15(38.5)	31(36.5)
不眠	8(32.0)	1(4.8)	6(15.4)	15(17.6)
徘徊	8(32.0)	4(19.0)	14(35.9)	26(30.6)
暴力	7(28.0)	5(23.8)	10(25.6)	22(25.9)
入院・入所	17(68.0)	3(14.3)	18(46.2)	38(44.7)
経済	17(68.0)	3(14.3)	22(56.4)	42(49.4)

<説明>

「入浴」については、福祉施設と在宅の間に、統計学的有意差を認めた（ $p<0.02$ ）。「不眠」については、医療機関と福祉施設の間に統計学的有意差を認めた（ $p<0.02$ ）。「入院・入所施設」については、医療機関と福祉施設の間、福祉施設と在宅の間に、統計学的有意差を認めた（それぞれ $p<0.001$, $p<0.02$ ）。「経済面」については、医療機関と福祉施設の間、福祉施設と在宅の間に、統計学的有意差を認めた（それぞれ $p<0.001$, $p<0.002$ ）。

G) 日常生活で見られる問題行動の介護困難度について

(1) 排泄障害 (表30)

- ①全体でも、疾患別でも「問題あり」が半数以上に見られた。
- ②対応困難な問題としての順位は、全体でも、疾患別でも1位に挙げられることが一番多かった。
- ③対応する介護人数は、1人が多かったが、2人必要なことも全体の1/5～1/3あり、比較的重労働と思われる。
- ④対応時間は30分以内が多かった。疾患別に見ると、血管性痴呆、頭部外傷後遺症及びその他の痴呆は5分以内が一番多く、アルツハイマー病は5分～10分以内が一番多かった。
- ⑤対応回数は、「1回」と「6～10回」に多かった。すなわち、1回で十分な例と、頻回な対応が必要な例に分かれた。なお、疾患別では、血管性痴呆が1回が多かったが、統計学的には違いはなかった。
- ⑥頻度は、全体でも、疾患別でも、「日に1度～日に数回」が多かった。

<小括>

排泄障害は、問題ありが半数以上に見られた。対応人数も2人が必要な割合も多く、かつ頻度は日に数回と、比較的重労働である。また、頻度も日に数回と多く、対応の困難さも高度といえる。

(2) 着脱衣障害 (表31)

- ①全体でも、疾患別でも、「問題あり」が半数以上にみられた。
- ②対応困難な問題としての順位は、全体では2位に挙げられることが一番多かった。疾患別に見ると、血管性痴呆は4位が一番多かったが、他は2位が一番多かった。
- ③対応する介護人数は、1人が多かったが、2人必要なことも全体の1/5～1/3に見られた。
- ④対応時間は30分以内が多かった。疾患別に見ると、血管性痴呆、頭部外傷後遺症及びその他の痴呆は5分以内が一番多く、アルツハイマー病は5分～10分以内が一番多かった。
- ⑤対応回数は、1回と2回に多かった。すなわち、1～2回で十分であった。なお、疾患別にみると、血管性痴呆とその他の痴呆は1回が、アルツハイマー病と頭部外傷後遺症は2回が一番多かった。
- ⑥頻度は、全体では、「日に1度～日に数回」が多かった。疾患別にみると、その他の痴呆を除いて、「日に1度～日に数回」が多かった。

<小括>

着脱衣障害は、問題ありが半数以上に見られた。対応人数も2人の割合が多く、日に数回の対応が必要な比較的重労働な問題といえる。対応の頻度は日に数回が多く、対応の困難さは、排泄障害より容易であったが、高度といえた。

(3) 摂食障害 (表32)

- ①全体では、「問題あり」は半数以下だった。疾患別にみると、アルツハイマー病のみ「問題あり」が半数以上に認められた。
- ②対応困難な問題としての順位は、全体では、2位以下に挙げられることが多かった。疾患別にみると、アルツハイマー病は4位が、血管性痴呆とその他の痴呆は2位が、頭部外傷後遺症は3位が一番多かった。
- ③対応する介護人数は、1人が多かった。
- ④対応時間は、全体でも、疾患別でも、11分～30分以内が多かった。
- ⑤対応回数は、全体でも、疾患別でも、3回が多かった。
- ⑥頻度は、全体でも、疾患別でも、「日に1度～日に数回」が多かった。

<小括>

摂食障害は、問題ありが約半数に見られた。対応の頻度が日に数回と多く、かつ時間も長かったが、重労働とは言えず、また対応の困難さも比較的軽度だった。